鮪立1～3区まとまる

要望整った

2年ぶりね

開口!!

まだ生れず

気仙沼市水産課などをまじえた、第二回懇談会に向け鮪立1～3区の人々はようやく復興に関する要望をまとめた。まちづくりの会は復興工事に関する内容を語り合うためにあるわけではないのだが、各関係者と地域の人々はそのことに目を奪われがちである。まちづくりの将来を見据えた時間にたえうる全体を考える姿勢はまだ生まれていない。

迷走する

まとまりもなく迷走し続けた鮪立地区防災集団移転協議会4月8日に鮪立地区の定期総会が行われ、復興委員会を発展的に解消し「鮪立の今後のまちづくりを考える会」に姿をかえ話合いを続ける予定だが、移転協議会は度重なる自治会の斡旋案も受け入れず、非被災者ですら心配する者まであらわれる始末。移転希望者と自治会各位や地域の心ある人々を悩ませ続けた。

斡旋案

集団移転に関する大臣同意のための地域の意見統一は時間切れ間近となっていた。自治会長、地田浜別家のお父さん、上沢のお父さん3名が移転希望者の声を聞き取り「台の越」案に的を絞り7月末斡旋案をまとめるべく動き出した。3名は手分けし地権者の同意をとり、市の関係課をまわり調整を行った。

7月24日午後には漁業集落整備事業のマスタープラン作成を市から請け計画をされている都市環境研究所の高鍋さん藤野さん海老原さんRPIの丸木さんから「現地で合流しましょう」と自治会に連絡が入った。上沢さんの家をお借りし話合を行った。そのご藪や夏草をかき分け現地調査を2時間ほどかけつぶさにしていただき、現在の地域の漁業集落の問題点を話合った。

7月26日には災害公営住宅や高台移転の設計を市から請けている八州の伊戸川さんと自治会長、上沢さん1区長さんと話合い「台の越」で設計をすすめるよう直接お願いをした。

8月8日憩の家にて自治会関係者の斡旋案を具体化した図面をもとに市用地課の説明会が行われ「台の越」案1本ですすめるとの言葉があった。

移転希望者の声を細かに拾いあげ、誰がどの区画に入るかや、台の越に焦点を当て最もよい区画作りや公営住宅のあり方を話合うことが今後の課題となるのだが、協議会と自治会の足並みの乱れを作った人々の責任を棚上げし次の展開へと進むことは、地域の人々の間に溝を深めるだけだろう。

情報共有せよ

まとまらない鮪立、いつでもまとまりのない鮪立は、今回のような大震災に遭ってもそのことがくり返された。悲しい現実を誰が変革していくのだろうか。役所におねだりし文句を言い続ける統制と依存型の20世紀によくあった市民と行政の関係は、失われた20年を経て失効した。ITを駆使し他地域と連携し知見を得、そこで「参加と自治の地域へ」と変革することが求められている。

鮪立地区のまとまらなさの主なる原因は事実と異なる噂や好き嫌いだけで対応してしまうことだ。人々が共有すべき正確で最新情報をもち語り合う場をつくろうとしない怠慢さと、地域の人々が使いこなせる情報媒体が少ないことである。小学生でもるんるん使いこなすIT機器社会。「パソコンを使えない！」と威張る人が大手を振る時代ではないが、相変わらず紙媒体と口媒体に頼りつづける不幸が地域の連携を阻んでいる。地域の人々の情報を得る媒体を変え21世紀のIT社会に合う人々へと自らが変わることを時代は要請している。

まちづくり

まちづくりはまだまだ先だ。まちづくりとはあらゆる事象に関連している人々が暮らしに係わる可能態をつくりだす概念だと考えるが、復興工事に係わる施設作りばかりに目が奪われている。そこでは真のまちづくりを話合うチャンスを逃し続けてしまうのだ。

8月1日鮪立では現在男主導のまちづくりの欠点を補うため主だった30人ほどの女性が集い「鮪立女子会を偶数月の第一土曜日午後7時開催」と決めた。女子会は定例化することになった。様々な問題を語り提案し実践し鮪立地区の21世紀のまちづくり＝生活のベクトル創りに立ち上がった。「会は女子に限ることはないので、地域の人々の参加をまっています」とのこと。

参加しようではないか。

記録し共有する

同時に話し合った内容を共有するためにメモ的議事録を作成し正確で最新の内容を各関係者に配布し、まとまらない鮪立を脱するための一歩を踏み出そうではないか。

食料とし冷凍保存

マンボウは5月中旬から沖に出れば10月まで突くことがある。旬は7月である。ひれを海面から出してゆらゆら泳ぐ姿を見つけたら30kmの全速で近づく。

長さ5m重さ5kgほどの手製のもりぞうで突く。突いた瞬間に底に向かうので逆流させ揚げる人と海の底まで放し泳がせる人と分かれる。畳二枚以上の大きさと300kgほどのマンボウを船に結わえ港に戻り船に揚げ解体する。皮膚は剣山のようにとがり人の肌を傷つけるので手袋は欠かせない。白い身と薄桃色の腸は冷凍し保存食となる。刺身・肝合えなど、茹で酢味噌で肴となる。熱を加えすぎると硬くなるので茹で方が難しい。

宿藤鮪報

2012（平成24）年
8月12日原稿完

編集・発行 佐藤敏宏

鮪立港
まちづくり
百年会

東日本大震災復興
コミュニティ・アーキテクト

1頁
開口／冷凍保存
鮪立地区まとまる
2頁
跡地利用イメージ図
女子会
3頁
鮪立1～3区
マスタープラン
4頁
地域の声
小松浩平さんに聞く

宿藤鮪報とは

宿浦・藤浜・鮪立の地名の頭文字を組み合わせた地名にゆかりのある題字にしました。「おらほう」と読みます。

2011年3月11日に起きた大震災による各種被災から気仙沼市唐桑町鮪立地区1区から5区に暮らす人々が立ち上がり行動し震災後の暮らし方を手に入れるために、今何を行うのがよいのかを考えるために話し合う。そのことを記録し共有するための地域紙です。

地域の人々が今現在何を求め、何に悩み、何を思っているのかを紙面を使いお伝えしていきたいと思っております。

声や意見をお寄せください。